

ファンタスティック闇
喰らいの一般竜

Silas

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダークソウル3に登場するのシンゴジラ改め闇喰らいのミディールというドラゴンに憑依した一般人がニユート・スキヤマンダーのトランクに移住したお話。

話した言葉が勝手に翻訳をされるミディール（一般人）の明日はどっちだ。
グリンデルバルドは死ぬ。

…これ原作ハリー・ポッターで良いんですかね？

目次

| | |
|---------------|----|
| プロローグっぽい | 1 |
| 保護されました(事後報告) | 9 |
| 幕間 一般局員の | 22 |

プロローグっぽい

その昔、イギリスの端に人の立ち入らぬ小さな森と、その奥に中世じみた城の廃墟があった。

何時作られたかわからない古びたこの廃墟は、まるで神話の時代の遺物かのような。

時間に晒され続けたその廃墟は階段より上を瓦礫へと変えており、かろうじて雨宿りできる程度に形をとどめているものの、人の手によつて整備されないこの廃墟はすぐにも崩れてしまいそうなのだそう。

この廃墟のある小さな森はいわばいわくつきいわくつきの場所で、できることなら近づきたくない場所の筆頭であった。

森に踏み入ると命の危険を感じるとか、恐ろしい唸り声が聞こえたとか、はたまた終末より這い出た龍がいるとか。

様々な噂が飛び交う土地であるのだ。

非魔法族にとつては不気味なところであることに間違いないが、驚くことに魔法に慣れ親しんだ魔法族もまたこの森を避け、あるいは危険視しているのだった。

実際に好奇心から意気揚々と森に踏み入った人物は、例外なく小一時間もしないうちに蒼白な顔で森から飛び出してくる。

そしてこう言うのだ、「今まで見たことのない恐ろしい魔法動物がいた」と。

魔法省も非魔法族の有志の人物らも捜査に乗り出したがこれといったものは見つからず、その後も森に入った人間による「不思議な魔法動物」の目撃証言が増え続けている。

魔法省が魔法動物の発見に至らなかったのは森に立ち込める白濁した濃霧からか、はたまた別の理由か。

どちらであれ、森の廃墟に住む巨大な魔法動物の下へたどり着くことはなかったのだ。

そうこうしているうちに森へ入ろうとする者はぐんぐん減っていった。

よほどの変人でもなければその魔法動物に辿り着く人物はいないだろう…。

「魔法動物学者をやらせてもらっています。ニユート・スキヤマンダーです」

よほどの変人でもなければ。

「ようこそニユート・スキヤマンダーよ。我は、そうだな。闇喰らいのミディールと名乗らせて貰おう」

◇

俺は闇喰らいのミディールです。はい。

知らない内に闇喰らいのミディールになって森の中にいたのです。

何言ってるか分かんないって感じだけど俺も分かんない（食い気味）

^{D a r k s o u l s}
ダークソウルつてあるじゃないか、俗に言うダクソ。

有名大作ダークファンタジーアクションRPGゲームである。

めいさく。

知らない人のために一応一言で言い表しておくとするば『火の時代というアンデッド蔓延る世界で自分自身の太陽を探すゲーム』だ（嘘は言つてない）

で、三部構成のダークソウル最終作にダークソウル3というのがあるわけですが、そのDLCの隠しボスに黒い竜がいるのです。

高耐久、高火力、状態異常無効（重要）、ついでに遠隔攻撃もお手のものの紛れもない強ボス。

それが闇喰らいのミディールというダクソのシンゴジ改め隠しボスなのだ…！。

つよい。

そんなミディールの容姿はというと、岩のように尖った黒の鱗（？）と皮膚が巨大な

体の足元から顔にまで覆っており、その背や手足の付け根に紫の結晶が生え、また古傷を埋めるようにして皮膚と鱗の隙間に覗いているのがわかる。

全体的に腹や皮が垂れ下がるだらしない様子ではないがまた筋骨粒々であるとも言
い難く、細い四肢に細長い尻尾と身を包んで有り余るほど巨大な翼が、少しばかり痩せ
たミディールの体に硬質なゴツゴツと尖った印象を持たせているのだ。

スラリと伸びた両足（四足歩行だが手足と言ひ換えていいだろう）の特に前脚の指先
はどこことなく驚を彷彿とさせるデザインで、後ろ足は少し踵を浮かせており前足に対し
てややガツシリしたドラゴンらしい。

古の竜とあつて実に巨大な体躯の持ち主であり、怪獣と言えその巨体に沿わぬ素早
さでプレイヤーを叩き潰そうと動くのだから、戦うには恐ろしく感じるものだ。

モンハンあたりと出演する作品を間違えてるんじゃないか、という動きをするため初
見のプレイヤー達は多分おそろくきつと目を剥くに違いない。

その巨軀から見て小さな頭（それでも大の大人を一口で食えるほど大きい）には体
や翼と同色の角が生えていて実にドラゴンらしい風貌をしている。

（ハリーポッターに登場するドラゴンに似たフォルムではあるかもしれない。数百年単
位で成長させて、黒い岩盤の鎧を着こませればミディールに近づくのではないだろう
か）

もつともミディールの場合、その巨体も、背に持ったボロボロの翼の大きさも、口から吐く炎が収束して白く光るビームのようになるブレスのレベルも、彼らとは比べられない程度に差があるので一般ドラゴンとは見間違えようもないと思うが。

ミディールの吐くレーザーもどきの炎は「薪の王総辞職ビーム」と呼ばれるのだとか。詳しくはイラストなり動画なりを見てください（切実）

さて（仕切り直し）

なんてことだ！目が覚めたらそんな闇喰らいのミディールになっているではないか！

そこに至るまでの過程の記憶もそれ以前も、こつぜんと消え失せたのかどうして見当たらない。

本当にどうということなのか。

ちなみに俺がミディールなんじゃないかと思つたわけは、自分の手やら何やらの見た目と体が明らかにおかしかったから目に入った湖で頑張つて自分の姿を見たことであつたり、呆然としながら曇つた空を見上げて溜息を吐いたところ口から出たビーム（炎）が今さつき曇天を貫いたという事件であつたり。

そんなことから「もしかして俺はダクソ3に出てくる闇喰らいのミディールになつてしまったのでは」と考えたのだ。

文字に起こすと本当に意味が分からないけど、それ以上に言いようがない。

知らない内にファンタジーな状況に遭遇したので、これは俗に言う憑依転生とかいうやつなのでは？とか考えてはみたもののトラックに轢かれた覚えもなく、神にスマホを与えられた記憶もなかった。

さてはこれ転生じゃねえな？（名推理）

ついでにどう見てもダクソの世界じゃないときた。

なんといつても空に太陽があるものだ！ダクソに太陽はないって一言言われております。あつたとしたら太陽騎士さん大歓喜です。

憑依ですらないのか…？（困惑）

この森には人も見当たらないから、生活基準なんかもわかんないのです。

結局俺が森の中でミディールになったことしかわかんぬえ。

敵対するやつがいたらどうするんだこれ。死ねるぞこれ。

いくら原作ミディールが強いとはいえ、こっちは一般人だ。

とりあえず姿勢を低くして息を潜めておこう…。

幸いこの森は薄暗いし白い霧が立ち込めている。

きつと気づかれることはあるまい。

内心ビクビクしながら俺は姿勢を低くし、なるべく周囲に溶け込むように体を丸め、呼吸をゆっくり浅くした。

ファンタジーの世界で不安そうに地べたに這うドラゴンの完成だった。

「…いやなんだこの状況」

ふとそんな言葉が竜の口から零れて消える。

冷たい地べたに丸まってしばらくジツとしていると、しだいに眠気がやってきて意識がうつらうつらとしてきたと思うと、気づけば安らかな眠りに落ちていたのだった。

(本人に自覚は無いが)相当永い時間眠った後、体が十分な睡眠をとったのか眠りが浅くなったところに、彼が訪れた。

ガサガサという枝の折れる音を聞いて、次に目を覚ましたときには青いコートを着た茶髪の青年が呆然とした様子でこっちを見上げていた。

若干の間を置いて青年が口を開いた。

「魔法動物学者をやらせてもらってます。ニユート・スキヤマンダーです」

「あ、丁寧にどうも。闇喰らいのミディール(仮)です」

…いやここハリー・ポッター世界じゃねえか！

こんな感じのミディール（憑依かつ自動翻訳機能付き）が頑張ります。

保護されました（事後報告）

なんやかんやあつてニユート・スキヤマンダーのトランクに移住——保護されたとも言う——しました。

多分身体のスベックだけ言うなら保護される側じゃなくて保護する側なのだけど、まあ中身が俺だから仕方ないと言えば仕方ない。

どうも、闇喰らいのミディール（憑依）です。

今やトランクの入り口近くにある、むしろ入り口のすぐそばと言うべき草原のセットを支配してしまった一般通過古竜です。（なおお竜が一般的かどうかはこの際考慮しない）

ちなみに草原を支配するまでの経緯として『空いてる場所を探してとりあえず草原に居座ると、魔法動物が草原に近づかなくなつて、すっかりミディールは草原の覇者になつていた。』なんてことがあつたり。

それを見たニユートが何を思ったのか、俺がいた森を再現してか草原に霧を作つてくれました：事実上の公認支配者だよどうしてくれよう。

：：草原は後に新設されていた。なんか申し訳ない。

さて、一切図ったわけではないのだが、この草原は入り口に近いためなのか、目を閉じて集中していれば外の情報を微かに拾える。良い立地だ。

トランクの中、というより自然界で原始的な生活するのは生粋の現代っ子からすればまあ退屈だと感じるもので。普段から特にすることもない俺はというと、もっぱらトランクの外に意識を集中しては魔法界やらの様子を探っていた。

立地の良さを利用して、流れ込んでくる匂いや音から外のさまを探る。要は娯楽か、暇潰しの類이었다。

とはいえ外の様子を知ることと、日に一度はやってくるニュートとの会話、くらいしか娯楽がないのだから悲しくなってくる。

最近ニュートに海外ドラマじみたコミュニケーション方法を試みているが、どうも。

とまあそんな感じで、とてつもなく暇を持って余しているように思えるのだ。

今日も目を瞑り、手に入った情報を組み合わせるは外の様子を推測していた。

——今日は一匹のニフラーがとてと木の階段をよじ登り、トランクの入り口に手を挟み込んで外の様子を窺っていた。空いた隙間によって今日はいつもより外の様子が

ありありとわかった。

運ばれてくる微かな潮の香りや単調な機械の駆動音、老若男女の入り混じったような様々な声と鮮明に聞こえてくるのだ。

楽しそうであつたり、調子が悪そうであつたり。実に賑やかな喧騒が主だっている。『そろそろ着くからな』とか『私ニューヨークは初めてだから楽しみ!』とか。新聞でも読んでいるのだろうか、ボソボソと『魔法動物飼育禁止に、グリンデルバルド失踪。大変なことだ:』なんて声まで。聞くとこころもう陸が見えてきているらしい。

それらを塗りつぶすように、ひととき大きな音が。トランクを床に置く音だろうか。そろそろニューヨークもトランクに入ってくるようだ、時間的にも目的は昼食か。

さあ、さつき得た情報から状況をちよつと推理してみようか:と、思ったより得られた情報が露骨きわまりない。

『この世界を内包したトランクは、ニューヨークに向けて海上を進んでいる』のだ。と
いかかもうすぐ着くつぽい。

とてもわかりやすく言えば、今日は『ファンタスティックビーストと魔法使いの旅』その当日だ。

待つてました。

(どうあれども、原作を乗り越えないとなにも始まらないからね仕方ないね)

原作の流れをおさらいすると、えー、パン屋志望のノーマジ、ジェイコブ・コワルスキーと魔法動物の入ったトランクを取り違い、手に持つ魔法のトランクから魔法動物を脱走させてしまうはずで。

俗にこれを収容違反と呼ぶとか呼ばないとか。

逃げたのはニフラーとオカミーと……透明になるやつに魔法サイだ。

各種1頭ずつ。

ついでに虫。

収容し終わったところにはオブスキュラスによって市民に魔法の存在が公になり、アメリカの魔法省どころか魔法の存在を知らない非魔法族たちを丸ごと大混乱に巻き込みはじめ。

あやうく魔法が白日の下晒されかけるこれは、はつきり言って世界の命運がかかっている出来事だ。

恐ろしいね（他人事）

そんな魔法界の運命を分けかねない大事件を前にして、外へ繋がる階段を降りてきたこの主人公は一体外で何をしていたのやら。

すぐに入ってくると思っていたのに対してようやく姿を現したニュートに疑問の目

をやる。

竜の表情がどこまで伝わるか甚だ疑問なので、できるだけ感情を込めるようにするの
も忘れない。

海外ドラマ特有の無言のコミュニケーションってやつを毎回こう試しているのだが。

「やあ、ミディール」

やたら気さくな挨拶が返ってきた。

こうしてどうも伝わっていない。

視線を外し、悔しかったので苦し紛れに皮肉を込めて

「…ずいぶんリラックスしてることで」

とか返すと、深刻そうな表情でニユートはそのまま魔法動物の餌やりに行ってしまった。
た。

リベンジを誓いつつ横たわる。

まあこんな感じで俺の日常はリラックスしていると云うかのんびりしている。

特にこれといった動乱があったわけでもないわけでも緊張する必要もないのだろうか
ど。

なんとまあ。

「平和だなあ」

それに尽きた。

◇

ダンブルドア先生によれば、どのような人もなにかしら胸の内に秘密を抱えているらしい。

「どのような形であれ人を成長させる栄養だ」。

おそらくは、一人で考えてそれを貫き通すことが重要であるとか、そういった意味合いの言葉であろう。そんな言葉をニュートがまだホグワーツにいたところに言われた記憶があった。

まさに今のニュートには、大雑把に数えても三つの秘密があった。

一つに、ニュートが魔法使いであること。

魔法界の住人であるニュートの杖。コート。トランク。その中身にまで、みんな魔法が込められているのだ。

言うまでもなくマグルには明かしてはならないものだ、もちろん例外はあるが概ねそうだろう。

一生ついてまわるであろうこの魔法使いであるという事実は、魔法を知らない者には体験しようも無い素晴らしい体験をニュートにもたらした。

魔法使いでなければ、魔法動物学者になることもなかったのだ。

次に、今現在アメリカで禁止されている魔法動物たちと、NY行きの船に乗っていること。原作でもそうだが、そこでしか買えない「お土産」を買うためだった。

そう長く滞在する気もなく、この隠し事はすぐに消えて失せるだろう、と考えていたのだ。

紆余曲折はあれ、深刻に考えてもいなかったが故の行動だったが、しかし見事なまでに法律違反である。

残念ながら魔法省の取り締まりによって目当てのものは店ごと無くなってしまったわけだが、図らずもこの火遊びとも取られかねない行為は、ニュートに素晴らしい出会いをもたらすことになった。

無二の親友。生涯の伴侶。

まだ誰も知らない。

最後の秘密は、ニュートの持つ魔法のトランクには魔法省がどうしても知りえない魔法動物が約一頭ばかりいるということだった。

これがどうも一番の問題として、ニュートの数少ない心配の種になっている。

『今までに見たことも無いような、恐ろしい魔法動物』。

魔法動物学者のニユートが、その言葉の意味についてまともに考えているとは思えないものだった。ところがその魔法動物の危険についてニユートはよく考えた。

ダクソらしく台詞にすれば、うーむどうしたものかといった具合だった。

今もそんな考えをしながら船に揺られる彼は、扉にあるとりつけの鍵を回しては、部屋で一人トランクの中身を気にかけていた。

部屋の床に置かれたトランクがごとりと重い音を鳴らし、NYまで一時間を切った船の一室で、ひとまずトランクを置いたニユートは思考の途中にふとイギリスの森を思いだした。

灰色の岩と大樹が満ちる、薄暗く、霧がどこまでもついてまわる小さな森だ。

幹から新たな芽が頭をだし、ひび割れた岩の隙間まで苔が這っていた。人はおろか鳥や虫すらも近づこうとしない魔の森。

雫が滴る若葉の絨毯に身を任せ、体を丸めたまま威圧感を放つ巨大なドラゴンはそこにいたのだ。

『ミグディール』。地下の神。妖精の王。ケルト神話の一端を担う神の名だ…

霧に浮かぶ巨大な黒い身体。岩のような鱗。その身を包んで余りある翼。どれもがいままでの魔法界において観測された、どの魔法生物をも優に上回っていた。

その中にはドラゴンもふくまれており、言語を介する巨大なドラゴン、それだけでも頭の無い役人にとってどれだけ危険なものか――。

そこまで思い返して、ニュートは思考がズレはじめていたことと、自分が倒したトランクに手をあてたまま止まっていたことに気づいた。

ぱちぱちと留め具を外しながら、またかつてを再確認するように、考えをなぞりはじめる。

今度はズレがないよう。

――誰も知らないのだ。

思考の海に半分浸かると、そんな言葉が浮かんだ。

少なくとも今の時代には『闇喰らいのミディール』の名は、その人格も、あるいはその存在の有無すら誰も確証を持っていない。

そもミディールと出会ったこと自体がまるで運命の糸に導かれるよう偶然が溢れたものだったのだ。あの先生すらも知らないに違いない。

ならば関わらせたくもないのである。

ミディールの存在そのものがニュートの抱える秘密だった。

誰も知らない。

ミディールが抱える闇も、誰も。

どのような過去があり、どうして心を閉ざしてしまったのか。ニュートも知り得なかったのだ。

ニュートの悩みとは、「どうやったらミディールの心のキズを癒せるのか」だった。

無論、今現在ミディール（憑依）にそんなものはない、ということはこちらで明記しておこう。

そんなことは露知らず、思考を巡らせるニュートは『どうしようもない』結論を出かけて、慌てて思考の海から自分を引っ張り出した。

その結論は欲しくなかったからだった。

倒したトランクの留め具を外し、あたりに人がいないことを見て、開いたトランクの口足を突っ込む。

革靴が木の段差にあたったことを確認するや否や、片手をトランクの縁にあてたかと

思うと、ニユートは柵でも飛び越えるようにトランクに飛び込んだ。

明らかに部屋の床よりも深く入れられたニユートの体はそのままずりりとトランクに飲み込まれて、頭が底に消えたころには、一人でに閉まったカバーがその影すらもまるで手品のように跡形もなく消してしまった。

一方でトランクに入った彼は階段を降りた先、すぐの霧が立つ草原に視線を走らせると、すぐにミディールを見つけたでいた。

探そうと思つて見つけられない方が難しい巨体だ。

薄い霧でできたカーテンの向こうに大きな黒龍が身体を丸めて横たわっている。目を瞑っているのだろう、身じろぎしない姿はまるで眠っているようだ。

だが眠つてはいないことはわかった。

緩やかな動きで頭を起こしたミディールはまるで今ニユートに気づいたように、ゆらりと頭をよこしてくる。

中空で視線がかち合い、ミディールの視線に射抜かれたニユートはとたんにはりつくような体のこわばりに襲われた。

ミディールの目には疑うような色が浮かんでおり、警戒されていることは明白で、立ち去るよう警告しているようだった。

ニュートは微笑を浮かべ、警戒する必要はないと伝えるためにも、ミディールへなるべく気さくに声をかけた。

落ち着いた発声でゆつくりと。

「やあ、ミディール」

数秒の間があつた。

しびれで感覚が消えたような錯覚に陥つたがすぐにそれも失せた。

ミディールが視線を逸らし、頭をもどして横たわつたのだ。

「…ずいぶん肝の据わつたことだ」

溜息と共に吐かれた言葉にはどこか呆れが含まれている。

圧倒的な存在感は鳴りを潜め、その姿は穏便で理知に富んでいるようにさえ見えた。

魔法動物と関わる中、こういう目で自分を見る動物たちを無数に見てきた。

見世物にされていたオーグリー、傷を負わされたヒツポグリフ。ひどい環境にいた
ニーズル。

彼もその魔法動物たちと同じだと思つた。

人を信頼できない。

言葉を弄しただけの力があつても、ニュートにはミディールが怯えた動物に見えて

仕方なかった。

ケルト神話の名前を知っている以上、彼がいつか人と関わったことは確かだ。そこで何かがあつたと考えるのが妥当であり、残念なことだが、魔法使いなら赤子のドラゴン程度どうにでもできる。

もし『そう』であるなら、世界中を数億という人間が支配する世界の中で、体を隠せないドラゴンのミディールに。

(平穩に生きられる場所はあるのか?)

腹をすかせた魔法動物の一匹が大ききいなないた。思考がかき消される。

頭をゆるくふって、食事にしてやろうと歩きだしたニュートの背にミディールの声が届いた。

誰に言うでもなく、囁くように小さな声だった。

「平和か…」

——くだらない。

聞こえなかったその言葉の先を、ニュートは確かに聞いた気がした。

幕間 一般局員の

1926年のある日、曇り空から降りかかる鈍銀の光がニューヨークに被さっていた昼下がり。

無数に立ち並ぶ街並みを抜け、通行人でごった返す大通りに侵入してからしばらく歩くと、ある港がそびえている。

デザインは「当時らしい港だ」としておこう。とどこどころ床板が軋むが、それでもまだ新しく大きな港だ。人員は十分におり、日に幾つもの船が身を寄せていた。

大きな池と大空が覆われていたその日、マグルでぎゆうぎゆう詰めの船に乗って、ニュートはようやく新天地の港へ到着した。

ニュートは船のスロープを下って、港のコンクリートを踏みしめるとあたりを見渡すと、旅行者でごった返す港の内に、暗色で身を包んだ魔法使いらしき人物がちらほら見た。

大股でどこかに向かっているらしく、彼らはニュートに目もくれない。
(よかった、気づいた様子すらない)

ニュートは張っていた気を緩め、手の中でトランクを持ち直すとゆっくりと息を吐き

でした。

マグルの船に乗っていたニュートは、彼らに見つかるのは以ての外、魔法使いに見咎められる行動もなるべく避けなければならなかった。

純血主義者からすれば何でもない事でも目障りに思うはずだ、下手に目をつけられればトランクの中身まで言及されかねない。

ただでさえ無茶苦茶な理屈を振り回す、頭の凝り固まった人物が権力を持つことが多く、そういった人物にクレームをつけられれば面倒極まるだろうと考えてのことだった。

純血至高主義がマグルの船に乗っているとは思えなかったが、なんとと言っても今のアメリカでは魔法動物を連れていくこと自体法律違反だ。極めて残念なのだが客観的な正論はニュートになかった。

特にミディールはアメリカじゃなくてもマズい……と。

人の密度が高い中で少々気を張っており、ニュートはひとまず上手く乗り越えたことに安堵していた。

(しかし初めに比べたら。だんだん慣れてきた)

良くも悪くも。

天井に釣られた電灯が薄暗く港のコンクリートを照らしている。

右から左へと視界の外へ消えていく人たちの隙間をすり抜けて、ニユートは入国審査待ちの行列に加わった。

並ぶ人数自体そう多くはなく、行列と呼ぶかも怪しいものだったが、あまり進まないままニユートが行列の先頭に辿り着くまでもしばらくかかった。

ようやく先頭に立って、入国審査のセットが見えた。

コンクリートの上に何列かしていくつも机が置かれており、職員が一人ずつ机を挟んで審査を行っているようだ。

旅先でよく見る光景だ。今更珍しくもない。

「次の方」

ニユートが列の先頭で少し待っていると、職員の中から声をかけられた。

ガタイが良い人物。なんというか、まるで軍人のような男だ。警備員が代わりに事務を受け持っているように見える。

呼ばれて職員へ歩きよったニユートはその軍人じみたその男の机に立ち止まると、職員の様子に気づいた。

顔は蒼褪めているうえに大粒の汗を流していて、見るからに体調が悪そうだ。

ニユートはその様子を不審に思いながらも机の前で立っていると、職員はちよつとした間を挟んでニユートへ質問を投げかけた。

ニュートはなんとなく、『アメリカに来たことはあるか』という質問が来るだろうと身構え。

「危険なものはありますか？」

「なんだって？」

つい聞き返した。

職員は体調が悪そうな表情を変えておらず、独特だがこういう入国審査の仕方もあるのだろう。なんとか納得させて、答えを返した。

「ああ、いいえありません」

「は？」

「え？」

心底驚いたような声で返されて、口から間の抜けた声が出た。

「…え？」

何がいけなかったのか。

◇

同日、ニューヨーク。

ほんの数分間だけ遡る。

曇り空の下で、ちやうど船もついたらばかりで人が港に雪崩れ込み、天井の影が流れる人の波を暗く照らしている。

ゆるやかな時間の流れを感じるニューヨークの港は今日もまた、多種多様な人種の旅の人々によつて鮮やかに彩られ、人の隙間を縫つて歓声じみたざわめきと事務的な声が飛び交つていた。

船旅を終えた客と事務的な声を交わす職員達の一人に、同僚の仲間から『シエパード』と呼ばれるマグルの局員がいた。

黒髪黒目。彫りが深く四角いの顔に、鍛えられているため首はそこそこに太く、肩幅や腕の太さも同じくそこそこある。しわ一つない制服を着て直立不動でいると実に軍人らしい。

美しい妻と子を2人持つているが、仕事を優先して中々家に居ない、『頑固な分からずや』だ。

自他ともに認めるほど勘が鋭かったシエパードは、犬が災害前に異常な行動をするように——あくまで彼が犬であるわけではないが——驚くべき精度の危機察知能力や直感と言つた類の持ち主だった。

それは武術を極めた達人が気配を読みとくように、もしくはどこぞの貧乏巫女が持つ鋭い勘のように第六感じみたものだ。

大雨くらいであればソワソワと落ち着かない程度だったが、大戦争の前には鳥肌を揺えるだけで一苦勞だったものである。

日常で役に立っていたと言うには限定的だったが、それこそ嵐とか豪雨のような災害にあたって嫌な予感が首筋を撫でた。天気予報代わりなり何なりにしても、まあ悪くない特技だったのだ。

『分からずや』の彼はその特技をいかして入国審査の一端を受け持っていた。

「はい、もう大丈夫です。ご協力ありがとうございます」

「ええどうも、ありがとうね」

「いいえ。初めてのニューヨークを楽しんで」

適当な言葉と、とってつけたような笑みで観光客の一人を送り出したシエパードは、すっかり仕事場として馴染んだ港を見回した。

港は今日も思い思いの格好で船から降りた客人たちと、慌ただしく動き回る青つばい制服の職員たちで溢れかえっていた。

シルクハットの紳士。派手な赤い服のご婦人。それらしく整えられた双子の子供。青いコートを着た男……。

船が着く都合上、壁の一面が取り払われている港には冷たい空気が吹き込み、ほの暗

い港にいる人々の大半は寒さをこらえるような仕草をしている。

見知らぬ旅人たちがうろうろ歩き回る、何の変哲もない港の様子にシエパードは違和感を覚えて眉をひそめた。

相変わらず人は騒がしく動き回っているし、その大半は職員以外の見知らぬ他人だ。

(見慣れた光景だ、なのに何がおかしい?)

そんな漠然とした違和感に、自分の直感が小さく警報を鳴らしていた。先程からどうも首筋に小さな氷をのせたような嫌な感じだ。

強いて言い表すなら「どこかから強い気配を感じる」ような気がしていた。なんなら重圧と言いついていい。ずしりと肩に乗っかっているような感じだったのだ。

生まれつき持っていた第六感じみたその影響で、少なからず生き物の気配だなんだというものはシエパードの身近にあったのだが、人の群れからこんな気配を感じるのは初めてだった。

生き物だと断言できないほどに強い圧であり、しかし壁の向こうで息を潜めているようにぼやけている。

経験則だが動物ならもつと上手く隠すはずだし、そもそもここには今現在人間しかい

ないはずだ。

だが、なんだろうか。人の気配というよりは、無理に例えるならばまるで巨大な生き物の気配がどこから聞き耳を立てているような。巨大な生き物、そうだ、怪獣のようなドラゴンだろうか。

顔を少し斜めに向けて、あたりの喧騒へ視線を巡らせても、視界いっぱいにはわらわらと動き回る人々には何も変わりはない。

ならこの考えや気配も自分の感じているものは気のせいだろうと結論付けた。そもそも巨大な生き物なんておとぎ話じゃあるまいし、そんな考えに至るなんて、俺は熱でもあるのだ。

さあ仕事をしなければ――。

足をそろえて背筋をピンと伸ばし、シエパードは次の仕事にとりかかろうと声を張り上げた。「次の方！」

単調に光る電灯の下、声は規律よく並んだ机をかきわけて進み、中々距離はあつたものの易々と地面の白線で立ち止まる行列に届く。

入国審査を受けるために並んでいた列の、先頭にいた若そうな男――ニユート・スキャマンダーだ――が反応して、シエパードに顔が向けられた。

強いクセも窺えず、一般人として溶け込んでいる人物だ。流れる人の波を背景にして立ち止まる姿が浮かんで見える。

あまりジロジロ見るとおかしな火種になりかねないが、シエパードは目を細めるとその姿をサツと眺めて男の情報を汲み取った。

青いコート。ブロンドの髪。6フィートはある高身長。大きな茶色のトランクを片手に引つ提げている。顔は、しつかり見えないがおそらくイギリス人だろう。いかにも観光客じみている。

順番だけ考えても、彼が次に担当する相手だ。

あらためて気合を入れなおすと、シエパードはこれから行う段取りを頭の中で簡単にまとめはじめる。

アメリカは初めてか、食料はあるか……頭に浮かんだのはマニユアルじみた形式的なものだったが、未だ体にかかる圧力から意識を反らすには十分だった。

時間がこのおかしくなった感覚も戻してくれるだろうと考えて、シエパードは仕事をしながら違和感が消えるのを待って——

と、まあ結論から言えば、ニユートがシエパードの机に向かって一步を踏み出すと、とたんにシエパードが覚えたその違和感は主張を強めた。

シエパードが感じていた気配や重圧はまさしくドラゴンのものであり、ド直球に言う

と闇喰らいのミディールの気配そのものだ。

そもそもミディールは次第によっては神々を屠殺するソウルの業の担い手と渡り合
い、数多の薪の王たちを喰らってきた古龍たちの末裔である。

身体に内包するソウル量は膨大であり、常に無意識ながら竜の身体から、少なくとも
この時代にとって圧倒的な存在感と威圧を放っているのだ。

魔法によって空間が半ば隔絶されているトランクからも、大人しくしていたところで
ミディール本体の異質な存在感がトランクからどうしても滲み出てしまっていた。

微かなものだったが勘の鋭い人物ならわかる程度だ。

つまり、彼が覚えた違和感も勘違いではない。

今日のミディールはニユートとともに移動しており、ニユートが勘の良い入国管理局
員との距離を縮めるということはミディールとの距離もまた縮まるということになる。

そして例の谷底で闇喰らいのミディールが繰り出す攻撃は、基本的に腕や尻尾を使つ
た物理攻撃だ。ミディールの腕が届く距離は、対抗手段がない生物にとって絶対に踏み
込みたくない間合いなのだ。

距離が近づくことでその間合いに踏み込んだシエパードが、その気になれば何を知覚
するでもなく死亡しうる状況下で、ミディール自身に害する意思がないにしても、命の
危機を強く感じてもおかしくはなかった。

そういったものに敏感なら尚更。

実際、シエパードの生まれ持った直感はつんぎくような悲鳴でもって叫んでいた。

『この男に関われば死ぬぞ?!』

男が一步二歩と近づくと、とうとうほうもない脱力感に襲われ、粟立った肌が大粒の冷汗を噴き出し、思考回路が逃げへ傾く。

足はその場で釘付けになって、逃げようという思考すら空回り。シエパードはパニックに陥った。

その場から動こうとしない体とは裏腹に、自分が遠く離れていくような錯覚に落ちる。

冷汗とともに論理的な思考が流れ出て、喧騒が遠ざかり、頭が痺れて五感がぼやけた。体がかじかみ体温が抜け落ちていくような感覚だ。

幽体離脱じみた不思議な体験に、何故か家族の顔がフラッシュバックして止まらなかつた。

そんな感覚がおかしくなるほどのミディアールの存在感に晒されて、シエパードは目の前に立つニュートへ明確な幻を重ねた。

——巨大なドラゴンだ。黒の岩盤に包まれた悪魔のような竜だ。アメリカを火の海にできる化物だ！巨大な体で俺を見下ろしている——

幻覚の竜を正面に据え、呼吸が詰まって今に潰れてしまいそうな圧力の中で、朦朧とする意識にシエパードは口走った。

「危険なものはありますか？」

しまったと思う間もなく、返答がくる。

「なんだって？…あー、いいえありません」

「は？」

「え？」

「…え？」

□□□□

——危険なものは？

——いいえありません。

——本当に？

——はい。

『何を言ってるんだこいつは』

しがない入国管理局員のシエパードは質問の答えを聞いて、ますますにでもそう叫びたい衝動に襲われた。なんとかこらえて平静をよそおう。

(危険物がないだつて? とんでもない! 宇宙人を運んでいるとでも言われた方がまだ説得力がある!)

目の前からまだ恐ろしい気配を感じるシエパードは、もうすっかり死んだような気分だった。

家族で撮った集合写真が浮かんで霞む。ついさつき見たはずなのに記憶は色褪せて消えかけている。

シエパードの体調は、頭の芯まで凍えるように冷め切ったかと思えば燃え盛るように感じるなんて始末で、俺は今に倒れそうな情けない姿を晒しているだろう。

いや、そもそも俺は立てているのか。そんなこともわからなくなるほどのしかかる圧はとてつもなく、ここまで白々しい輩も初めてだった。

この男を調べればまず間違いなくトランクからはマズいものが出るだろう。

今も世界がひっくり返り返りそうな重圧の中でかろうじて立っているのだ。こんな気配を発するのはきつと麻薬などといったものではなく、本人の意思のみで大勢が死に、

それでもなお足りないようなかつてないほどの脅威だ。

——でなければここまでの圧がありうるのか？

一周回って冷静さを取り戻した気がするような思考で、シエパードはふと助けを求めて横の同僚に目を走らせる。同僚と丁度目が合い、暗闇に浸かったまま一筋の光を垣間見た気分になった。

必死に表情と目で訴えかける。

『助けてくれ！そうだ、なんなら警備員なりを呼んでくれ！』
必死である。

警備員にどうこうできるとは思わなかったが、一刻も早くここを離れたかったシエパードはなりふりをかまわなかった。

「頼むからどうにかしてくれ」という渾身の願いを込められた視線はかくして同僚に届き——

◇

「ニューヨークへようこそ」

そんな台詞と共に握手をして観光客を送り出す。

次の仕事が来るまでのわずかな時間に、シエパードの同僚はちらと隣で業務に励む仕事仲間のシエパードの様子を見て、彼の様子を不審に思った。

さつき来た青いコートの男とまだ話している。

普段ならもう五人は捌いているころなのに、一人に対してずいぶん時間を割いているようだ。

シエパードに劣ると自負する自分ですら今さつき一人送り出していた。

(シエパードのやつなにやっつてんだ?)

視界の隅に映るシエパードは拳動不審というか、膝が笑ってないか?

顔も蒼褪めているように見えるのだ。

なにかおかしいんじゃないか?

半ば確信に近い疑問の正体を探るべく、まだ次の仕事までありそうなのを見て、軽く

顔を向けるとシエパードの姿をとらえた。

驚きに目を見開く。

シエパードは持ち前の強面を苦痛に歪ませ、(普段を知らない人間には分からないだろうが)震える体を必死に抑え込んでいた。

顔は蒼褪めて冷汗が零れ落ちている。

仕事も進んでいないようだ。

(なんてこった)

心の中で驚きに満ちた言葉が浮かんだ。

あのシエパードだぞ！

熊と正面切つて殴り合うのが趣味とすら揶揄されるあのシエパードだ！

——何かが起こっている。

漠然とした違和感が確信に変わった。

見ていることに気づかれたのか、シエパードに睨まれるが、それも覇気がない。

力は籠っているようだが空回りしているような、不自然な印象を受ける。

震える体。冷汗。入国希望の人物をその場に留め続けている状況…。

(おいおいまさか)

そうかわかったぞ。シエパードがどんな状況に置かれているのか。

流石シエパード。恐ろしい胆力だまったく、まさか——

高熱だつてのに仕事をしようなんて考えるとほ！

それに今にも倒れそうなのに仕事を続けようとしているのだ。

(仕事への考え方は気に食わなかったが、中々芯があるじゃねえか)

体調が悪いなら休めば良いものを…。

(だが正直、見直したよ。この仕事が終わったら上司には上手く言つといてやる)

すっかり休めよ。なに、仕事は代わりにやっておいてやるから——

自分を見るシエパードにサムズアップを送って、同僚は気持ちよく仕事に戻った。

◇

警備員でも呼んでほしいものだという切実な思いと期待が込められたそれは、にこやかに「ニューヨークへようこそ」などと見るからのおぼりの旅行者と握手していた同僚のサムズアップによって見事に玉碎される。

(勘弁してくれ)

だめだ、俺以外気づいてない。

その結論に至るまでそう時間はいらなかった。

もちろん、生まれついた超常的な勘の鋭さ、空気の色を読むその直感がトランクの中のドラゴンの存在をくみ取ったなど知る由もない。

日常のルーチンワークを見せつけられ、また思考に冷水がかけられた。

もう一度だけ正面に立つ男をみる。

片手に大きなトランクを引っ提げているイギリス人。

(…待てよう？この重圧の正体はこの荷物によるものではないか？)

微かに動いた思考で突発的にはじき出された考えに、シエパードはどうしてかとてもしつくり来る感覚を覚えた。

であれば、ここでシエパードに提示された選択肢は二つ。気づかないふりをして送り出すか、ここで引き留めるか。

この男が運ぶ者を爆弾と仮定すれば、爆発する場所が変わる程度だ。

アメリカの見知らぬ誰かが死ぬか、ここで俺が死ぬか。

シエパードの脳裏に家で待つ妻と子供たちの顔がちらつく。

ヒステリックに警報を鳴らし続ける思考回路はそれを燃料にまた加熱を始めた。生まれ持った勘が最適な行動を導き出し、また衝動的にシエパードは口走った。

「荷物を見せてください」

自分でも驚くような言葉だった。

『何を言っているんだ』という言葉がそのまま返ってきた。

言葉に対して訝しげな表情をした男は、少し身をかがめ…トランクを机の上に差し出した。

机の上に置かれたトランクは何の変哲もないものにしか見えない。

普通、差し出すか？

これを？

拍子抜けして、つい横の同僚を見た。

ニユーヨークへようこそなんて言いながら見るからにおのぼりの旅行者と握手している。

その顔には笑顔が浮かんでいた。

(ああ、チクシヨウ)

…カチリと小さな音が聞こえた気がして、トランクに目を戻した。

ニユートにだけ『MUGGLE WORTHY マグル用』の表示が見える。

仕方ない。パチパチとトランクを開けて中身を見た。

服と時計と虫眼鏡…普通だ。

トランクの底までひっくり返しても普通の客と何ら変わりない中身。

(何が起こった?)

——気が付けばメーターを吹っ切る圧力も、命の危険はその痕跡すら残さず消えていた。

なんだというんだ、あの気配は気のせいだったとでも？

(そんな馬鹿な)

そう思ったところで実際に重圧は消え失せて、いつの間にか遠のいていた港の喧騒すら耳に戻ってきている。

啞然としながらも思考を阻害していたものはなく、考えはまとまった。

改めて選択肢を提示される。

◇◇◇◇

ニュートがニユーヨークの銀行でニフラーを追いかけていた、丁度そのくらいの時刻にシエパードとその上司とでこんな会話がされていた。

「へえ、そいつは面白いなシエパード。お前が担当した旅行者にそんな危険なやつがいたなんて気づきもしなかった」

「そう断言されると、自分でもあれが白昼夢のような気がしてきますね」

「実際そうだろうか」

(まあそう思うだろうな、例えば俺でもそうする)

シエパードは上司の言葉を聞いてそう思った。

自分が体験したあの重圧は説明したところでわからないし信じてもらえないだろう。

あまりにも荒唐無稽だ。

それでもシエパードは自分の上司に、自身の経験を話していた。

「はあ。なあシエパード、それが事実として、何でそいつを入国させたんだ？矛盾してるし、作り話にしてもお前らしくない。一体何が言いたい？」

最終的に、シエパードはニュートに入国の許可を出していた。

あの気配が気のせいだとは思わなかったが、気のせいならばそれでいい。

そもそもあの男が気配の大本ではなかったかもしれない、他の何かがちょうどそう思わせただけなのか。

たとえ気のせいではなかったとしても、どちらでもよかったのだ。

「ん？ああそうだ、今日はもう帰らせてもらいますよ上司殿」

「…まだ日も落ちてないぞ？」

「えー、体調不良ですよ」

わざとらしく人差し指で頭を掻きながらシエパードはそう言った。

正しくはないだろうが、シエパードは結論を出したのだ。

人にはどうしようもない状況というものがあり、それは何の前兆も無く唐突に現れる災害だ。

災害の前に人は無力で、何の脈絡もなく死ぬということ。

「死ぬ前にできるだけ長く、家族の顔が見たくなりました」
そんな気分だった。

上司はやれやれと首を降って、シエパードに言い放った。
「病院行って明日は休め」